

水俣湾内で実態調査

工場、漁民側共同で

魚も網にかからず

底には排水の沈でん物

漁業被害補償一億円を要求する十三日新日録水俣工場側と二回目の団交を行なった水俣市漁協二百人は漁民側要求一億円、工場側回答一千四の懸にこたわらず工場および漁民が一体となり、水俣湾を中心とした工場排水による汚染漁場の共同実地調査を行ない、結果をまとめたのち補償額を決めることになったため十五日午前一時、水俣市漁協約百人、工場側石野、尾岡次長ほか十数同技術者、水俣市漁協関係者など十人が百問答から数隻に分乗、水俣湾内馬力瀬、赤路瀬沖合、茂道沿岸など数カ所の汚染地帯に向った。

モもいまはなし

手作業の発動機船と小舟による地引網で馬力瀬網代の下へ工場排水により海底に沈でんする不純

物の調査を行なった結果、付近

の調査は平均一メートルの厚さ下へがびびりしており網も引け

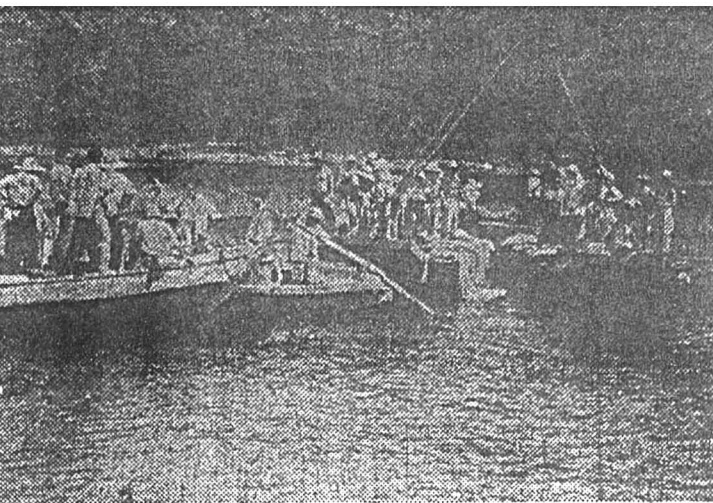
ないありさまで、各舟上の漁民は網についた下へを縁の先で払い落して引揚げていたが、工場関係者も現場を目のあたりに見て漁民たちの説明にいちいちうなずいて

りなどとはいへず協議できない状態でも今回の調査では工場側としてわれわれの脈をう理解してくるだろうと語っていた。

いつばつ水俣市でも時折丸などの漁船調査船を出動させ同湾の毒性分布状態の調査を行なっておりこれら総合調査の結果がまとまり次第漁民被害の補償については工場側から十七日はっきりとした回答を示すことになっているが、同間知は公衆な多くの問題が残されてはいるものの世論をうまく盛り上りをさせ漁民はもう工場側県、市民も結束して解決を求めてもらいたいとの声が高揚中だとい

漁民の船による接触時の魚類のときはこの舟引網一網の水揚げは二百貫を下らず、また赤路瀬沿岸などには以前は無数の漁が漁船に驚かしていたが現在はこれも皆無で、同地方で最も有勢だった馬力瀬も現在では魚の巣とみられる海底の岩に下へがかり魚類が寄りつかなくなったという。

またウナギ網やホラ貝、ホコ釣



漁民、新日録の水俣工場を調査する関係者